

I
蜂起する原始共產制

詩劇断章 鬬斧の歌

フレップー

暗雲が深くたれ込め

煩刺す風が

原野を吹き抜け

そして雨が

雹^{ヒョウ}を含んだ雨が

大地を激しく叩きつけ

雷^{ライ}が鳴り渡る

フチよ

われらがツチグモ族の

選ばれし戦士たち

わが父とウタリたちは

今どこに・・・

ヤマト族の

許されぬ侵略と暴虐

そして殺された多くのウタリたち

戦わなければ

われらがツチグモ族は滅びよう

フチー

わが息子の息子

フレップよ

残念だが

そなたの不吉な予感

はずれていない

ヤマトタケルの申し出に

全族会議の決定に従って

和議を結びに

敵陣へと赴いた

われらがツチグモ族の

選ばれし戦士たち

わが息子

そなたの父と

ウタリたちは

ヤマトタケルの奸計に乗せられて

皆殺しの目にあつたのだ

フレップー

フチよ

私の心臓は

森と大地を味方にした
われらがツチグモ族は
決してヤマト族に負けはしない
だが

次々と殺されてゆくウタリたち

わが大人たちの苦悩を

私も知らぬ訳ではない

だがフチよ

ヤマトタケルとかいう敵将との

和議に応ずるということは・・・

私にはわからない

不吉な予感

胸底から首をもたげてくる

不吉な予感

フチよ

占ってくれ

その千里も見透す霊術で

われらがツチグモ族の

選ばれし戦士たち

わが父とウタリたちのことを

高鳴っている

私の心臓は

怒りの爆発で破裂しそうだ

われらがツチグモ族の

選ばれし戦士たち

わが父とウタリたちが

殺された

和議を結びに

敵陣へと赴いて

殺された

だまされて

殺された

ヤマトタケルのだまし打ちに合つて

殺された

フチよ

私は許せない

奴らヤマト族の汚らしさを

奴らヤマト族の恥知らずな手口を

私の血はたぎり立つ

私の血は煮えくりかえる

フチ――

わが息子の息子

フレップよ

和議を結びに

敵陣へと赴いた

われらがツチグモ族の

選ばれし戦士

私の息子

そなたの父と

ウタリたちは

奴らに殺されただけではない

奴らはわれらが戦士たちを

切りきざんで火にあぶり

ガツガツと食ったのだ

骨までしゃぶって食ったのだ

フレップ――

フチよ

私の怒りは度を越した

私の怒りは荒れ狂う嵐

私の怒りは全ツチグモ族の怒り

私は殺る

必ずヤマトタケルを打ち倒し

ヤマト族を撃ち滅ぼす

この手で

奴の頭を叩き割り

奴らの首をひきちぎる

たとえウタリ全員が反対しても

フチよ

私は独りでもやってみせる

このまま奴らに

戦わずして滅ぼされるよりも

戦って

戦って

戦って

ヤマト族の一人でも多く殺して

そして死のう

われらがツチグモ族の独立と自由

そして森と大地の永久なる命のために

フチよ

私はまちがっているだろうか

聞かせてくれ

あなたの考えを

あなたの卒直な考えを

フチ――

わが息子の息子

フレップよ

そなたのはやる気持はよくわかる

私の心臓はそなたの心臓

そなたの怒りは私の怒り

だがそなた独りが

いかに強く

いかに戦さにたくみで

いかにすぐれた闘魂をもつていようと

それだけでは

それだけでは勝ち抜けぬ

ヤマト族を甘くみてはいけないよ

ヤマトタケルを甘くみてはいけないよ

奴らは一度や二度は負けても

必ず再びやってきて

必ずわれらを滅ぼすだろう

奴らはすでにやっている

奴らに従わぬ異部族を

いくつもいくつも滅ぼしてる

奴らは自然に生きる部族を滅ぼして

森の木を切り倒し

柵をつくって大地を囲い

地をほじくり返して稲を植え

血に飢えた兵を養なつて

民人の自由を奪い去る

国家というものを

つくろうとしているのだ

フレップよ

ヤマト族の生活は

われらがツチグモ族の生活とは

まるつきり違うのだ

奴らには上下の差別というものがあり

下のもののみがあくせく働いて

上のものは働かず

下のものがつくった食糧の

上前をはねて暮しているのだ

その頂点にいるのが
ヤマトタケルの氏族なのだ
フレップよ

敵を撃ち滅ぼすためには
まず敵がいかなるものであり
敵の弱点がどこにあるのかを
その全てに渡って

知る必要があるのだよ

そしてわれらがツチグモ族の

弱点と強みをも

しっかりとつかんでなけりゃならんのだよ

ヤマト族の連中は

石斧よりもよく切れる

鉄剣という武器をもっていることを

忘れてはだめだよ

フレップ――

フチよ

ありがとう

あなたの貴重な注告を

私は決してむだにはしない

だが心配はいらないよ
このフレップ

今までむだに生き

むだに戦ってきではないのだ

私には考えがある

大いなる考えがある

私は考えている

ヤマトタケルを陥れ

奴らを確実に撃ち滅ぼす

大いなる術を考えている

フチよ

今私は想い起こす

昨日のことのように想い起こす

ヤマト族を相手に

わが父とともに戦ってきた

数々の戦さと

数々の経験

私は必ずやりとげる

わが父とウタリの教えをひきついで

わが父とウタリのカタキを打つために

われらがツチグモ族の全てを賭けて

私は必ず勝つてみせる

ヤマトタケルをぶち殺し

ヤマト族を撃ち滅ぼしてやるのだ

フチよ

この私に大いなる力を与えてくれ

勝利する力をさずけてくれ

ウタリたちの勇気を

ウタリたちの闘魂を

ふるい起こしてくれ

勝敗は

挙族的団結いかんにこそ

かかっているのだ

私は全族会議に提起しよう

私は戦闘隊長に志願しよう

日和る長老たちとチャランケし

若き戦士たちを軸にして

女子供も結果し

挙族的戦闘体制をつくり出そう

フチよ

協力してくれ

フチよ

最後まで見とどけてくれ

あなたの血をひく息子の子息

私フレップの心臓は

紅く烈しく燃えている

さあ 血の嵐よ やってこい

大地をヤマト族の血の海で

真赤に真赤に染めようぞ

森と大地を武器にして

勝利の戦鼓を打ち鳴らし

闘斧の歌をかなでよう

合唱――

へしおれ ヤマトタケルの手足を

かちわれ ヤマトタケルの頭を

ぶつきれ ヤマトタケルの喉頭を

つきさせ ヤマトタケルの心臓を

(リフレイン)

狂い咲いたバラ一輪よ

闇夜の世界

ローマは太陽を奪った
奴らは俺の目を抉り

耳を削いで鼻をつぶし
手と足には

重い鎖をとりつけた

闇夜の行進

ローマは狂気をおしつけた

奴らは巨石を背負わせて
運ばせては運びかえさせる

尽きることなき苦役を

ムチと剣とおしつけた

だがローマよ

驕りたかぶる奴隷主よ

お前は俺の肉体を束縛し

狂気の行進を強いようと

わが反逆する詩魂^{ソング}を

奪うことはできぬのだ

ローマよ 世界帝国よ

せいぜい驕りたかぶるがいい
とことん驕りたかぶるがいい

ローマよ お前は

お前がその巨石で踏みつけた
われらが森と大地の同胞の

怒れる劫火に包まれて

必ず滅び去るのだ

俺には聞こえる

その時のお前の苦悶の叫びが

俺には聞こえる

わが同胞たちの雄叫びが

俺は生きる

たとえわが肉体の滅び去り

肉の命の尽きんとも

俺は同胞生者の肉に憑き

幾度となく甦えろう

わが尽きせぬ詩魂^{ソング}の源は

森と大地のわが故郷

故郷を恋うる恋心

詩心燃える恋心

ローマを詠う叛逆詩

狂気と正気の狭間に

ひきさかれつつも

狂い咲いたバラ一輪よ

育て

わが熱き血潮を糧にして

燃えろ

わが熱涙に花弁を濡らし

翔んでいけ

わが胸板を突き破り

そしてそのトゲを突き立てよ

ローマのその肥大した心臓に

ああ わが心の裡庭に

狂い咲いたバラ一輪よ

老人の死

限りなく広がる

真青な海

抜けるような空

ヤシは声高に

風に鳴り

いきいきとした緑は

深く秘かに息づいて

環礁に打ち寄せる波は

濃紺から

エメラルドへと変化し

岸に砕けて

浜に散る

おだやかな潮騒と

海鳥の

透き徹る叫びと

フランギパニの

甘い香りと

そして音もなく訪れる

たそがれ
暮れなずむ
島の浜辺
真赤に燃え立った
太陽が
風いだ海の
水平線下に
心静かに沈みゆき
死期を悟った老人は
孫を呼び寄せ
問わず語りに
語りだす
ワシがオマエと同じような
小さな子供だった頃
島は平和で豊かだった
貧富の差なく
争いごとなく
驕るものなく
卑下するものなく
子供たちは

すくすくと育ち
若者たちは
漁にいそしみ
老人たちは
畑をたがやし
男も女も
手を取り合つて
精霊宿る
木々たち
草たち
鳥たち
虫たちに親しんで
生けるもの皆が
協力し合い
育み合つていた
誰れ一人
病人といえども
食に貧することなく
皆が能力に応じて働き
必要に応じて分配し

決して余計に獲ることもなく
それは文明人たちの言う
共産主義
そのものだった
だが
いつしか白人たちがやってきて
島の平和は乱されて
島の豊かさは奪われた
黒い大きな船に乗ってやってきた
奴らは
若い男たちを生捕りにし
若い娘たちをはずかしめ
はむかうものを撃ち殺し
島じゅうを荒した
生捕りにされた若者たちは
奴隷として売りとばされ
二度と島には戻れなかった
それから奴らは住みついて
老人子供をこき使い
奴隷労働でいためつけ

島のコブラを奪い去った
ワシが若者へと成長した時
奴らはワシを捕まえて
黒い大きな船に乗せ
いく日もいく日も
海を越えて
遠い遠い
大きな大きな島に
連れ去った
そこで奴らは
ワシを奴隷として売りとばし
ワシは大きな農場で
日の出前から
日没まで
毎日毎日
ムチ打たれ
食うものもロクに与えられずに
何日も何日も働かされた
ワシは
親しくなった仲間から

白人のコトバと文字とを学びとり
白人の文明世界を教えられた
ある日ワシは逃げ出した
その仲間とともに
奴隷農場を逃げ出して
大きな町に逃げ込んだ
ワシは
プロレタリアートになって
働いた
ワシは
工場で働いて得たカネで
宿を借り
メシを食い
本を買って勉強した
白人の学者で
マルクス先生というのがおった
ワシは
マルクス先生の本を買って
何度も何度も読み返し
そして

ワシがその本を理解した時
ワシは
心底から失望した
しょせんマルクス先生は
驕りたかぶる白人の
同類にしかすぎなかったのだ
マルクスはぬかしおった
白人の文明は
必然的に勝利し
ワシら遅れた土人は
必然的に敗北し
滅ぼされるのだと
ワシは
マルクスの本を便所に捨てて
故郷恋しさに
泣きくれた
白い肌の
プロレタリアートは
ワシらのような
黒い肌の

プロレタリアートを
侮辱し
睥みつけた
奴らはワシらを
両足で踏みつけておきながら
ブルジョアジー打倒！
などと叫んでいた
ワシは
白人ブルジョアジーからの
抑圧・搾取だけでなく
白人プロレタリアートからの
抑圧にも耐え抜いて
ひたすら
島に帰る旅費を
貯めるために働いた
ワシが
生まれ故郷の島に着いた時
島は深く悲しみの海に
沈んでいた
島人たちは貧しく

島人たちは活気なく
病人たちは死んでいった
ワシは
どうにか漁で生きのびた
島にはもはや
昔の協力し合う生活はなく
すべてはカネで計られた
ワシは
ワシと同じように
心痛める娘と
結婚した
ワシらは
暗い心で
オマエの母を生んだ
それから時がすぎて
今度は
銃砲もった
黄人たちがやってきて
白人たちを追い出した
しかし黄人たちも

白人から解放してやる
とは言いながら
白人と全く同じように
ワシら島人を抑圧し
ワシら島人を搾取した
それからしばらく時がすぎ
また白人がやってきて
黄人は立ち去った
それからしばらく時がすぎ
今度は大きな漁船に乗った
黄人たちがやってきて
ワシらの海を荒して
ワシらの魚たちを
大量にかつさらっていった
それからしばらく時がすぎ
今度は大きな軍艦に乗った
白人たちがやってきて
ピカドン
ピカドン
天を焦し

海を引き裂く
原爆実験をやつて
黒い雨を降らせて
ワシらの海の魚を殺し
魚を食べた
ワシらの仲間を殺した
孫よ
白人や黄人を
決して信用してはいけない
奴らの生活を
決してまねてはいけない
奴らのもたらすものを
決して受け入れてはいけない
奴らの文明とやらは
ワシらの先祖を育んできた
豊かな自然を破壊し
ワシらの平和で誇り高い生活を
メチャクチャに破壊し
ワシらを不幸のどん底に
ひきずり込んだのだ

孫よ

戦うのだ

呪われた文明を破壊し

ワシらの平和で誇り高い生活を

取りもどすために

孫よ

最後の一人になるまで

戦うのだ

ここまで話してきた老人は

そこで深い大きな息をして

静かに

ゆっくりと

目を閉じた

メル・コ・ヤン・チロンヌップ

メル・コ・ヤン 若きチロンヌップよ
メル・コ・ヤン 孤独のチロンヌップよ
メル・コ・ヤン 想い起こせ
メル・コ・ヤン あの日のことを
メル・コ・ヤン 決して忘れ得ぬ
メル・コ・ヤン あの日のことを
メル・コ・ヤン お前の母が殺された
メル・コ・ヤン あの忌しの日のことを
メル・コ・ヤン シャモどもに
メル・コ・ヤン 追いつめられ
メル・コ・ヤン お前の母は
メル・コ・ヤン 撃ち殺された
メル・コ・ヤン その熱い血は
メル・コ・ヤン 雪原を真赤に染めた
メル・コ・ヤン お前は生捕られ
メル・コ・ヤン シャモどもの
メル・コ・ヤン 見世物にされるため
メル・コ・ヤン 鉄檻にぶち込まれ

メル・コ・ヤン シヤモどもの手で
メル・コ・ヤン 育てられてきた

メル・コ・ヤン 若きチロンヌップよ

メル・コ・ヤン 囚われしチロンヌップよ

メル・コ・ヤン 決して忘れるな

メル・コ・ヤン かつてお前が

メル・コ・ヤン あの真白き雪原で

メル・コ・ヤン 母に教えられた

メル・コ・ヤン あの野生の

メル・コ・ヤン あの自由の

メル・コ・ヤン あの戦いの

メル・コ・ヤン 生き生きとした

メル・コ・ヤン 充実した日々を

メル・コ・ヤン 呼び起こせ

メル・コ・ヤン かきたてろ

メル・コ・ヤン お前のからだに宿る

メル・コ・ヤン あの誇り高き血を

メル・コ・ヤン 燃え立たせ

メル・コ・ヤン 沸き立たせ

メル・コ・ヤン お前のからだに潜む
メル・コ・ヤン あの汚れなき血を
メル・コ・ヤン そしてお前の
メル・コ・ヤン その眠り込んだラマハに
メル・コ・ヤン 逆流させる

メル・コ・ヤン 若きチロンヌップよ

メル・コ・ヤン うづくまるチロンヌップよ

メル・コ・ヤン ぬくぬくとした

メル・コ・ヤン 鉄檻のなかで

メル・コ・ヤン 飼い殺される運命を

メル・コ・ヤン お前は受け入れるのか

メル・コ・ヤン それとも

メル・コ・ヤン 雪原に飢える

メル・コ・ヤン 誇り高き死を

メル・コ・ヤン 生きるのか

メル・コ・ヤン 若きチロンヌップよ

メル・コ・ヤン 鉄檻のチロンヌップよ

メル・コ・ヤン その奴隷的生を

メル・コ・ヤン 拒絶せよ

メル・コ・ヤン 偽りの生活を

メル・コ・ヤン 拒絶せよ

メル・コ・ヤン さあ

メル・コ・ヤン 起ち上がるのだ

メル・コ・ヤン お前の

メル・コ・ヤン その野生のラマハを

メル・コ・ヤン 腐らせる

メル・コ・ヤン シヤモどもの餌を

メル・コ・ヤン 拒絶して

メル・コ・ヤン シヤモどもの喉頭に

メル・コ・ヤン 喰いつくのだ

メル・コ・ヤン 鉄檻を飛び越えて

メル・コ・ヤン 己が身を

メル・コ・ヤン 雪原へと

メル・コ・ヤン 解き放つのだ

メル・コ・ヤン 大地は待っている

メル・コ・ヤン お前の

メル・コ・ヤン そのしつかりと

メル・コ・ヤン 踏み込む脚を

メル・コ・ヤン カムイは祝福する

メル・コ・ヤン お前の

メル・コ・ヤン 雪原を疾駆する

メル・コ・ヤン その勇姿を

メル・コ・ヤン 若きチロンヌップよ

メル・コ・ヤン 大地を疾駆する

メル・コ・ヤン チロンヌップよ

メル・コ・ヤン 己がラマハを

メル・コ・ヤン 大地に埋めよ

メル・コ・ヤン カムイが宿る

メル・コ・ヤン 大地に埋めよ